抜き刷りダイジェスト版

ただ夜散歩するだけの小説です　寺地はるな

寺地さんの作品の中で、
一番好きです **原田ひ香**さん

Haruki Bunko
ハルキ文庫

かで、藍色で、心細い。つめたい空気に耳がじんと痺れて、庇うように両手で耳を覆うと音がさらに遠くなった。夜道はよりいっそう海の底らしさを増した。目の前を空想上のえびがびゃんびゃんと存外速い動きで泳いでいった。風にゆらゆら煽られる路上のゴミは、名も知らぬ海草のようだ。

前方に女の人がふたりいるのに気づいて、歩く速度を緩めた。ふたりは時折振り返って、あきらかにこちらを気にしている。自動販売機の光が女の人の顔をあざやかに照らし出した。

「塩田さん」

名を呼ばれた塩田さんがはじかれたように立ち止まる。相手が実成だと知って、驚いたと同時に安堵したように見えた。

「実成くん、また会ったね」

昼間より薄着な塩田さんは、連れの女性に「この人、会社の人」と耳打ちしている。「だからだいじょうぶ」とも。それを聞いて、ああ警戒されていたんだな、と知る。不審者あつかいするなんて失礼だ、とは思わない。多くの女の人にとって夜道で後ろに知らない人がいるのはおそろしいことで、実成が夜道を「こわい」と思わずに済むのは塩田さんより豪胆だからではない。

「実成くん、なにしてるの」

「えっと、散歩です」

こんな時間に？　と不審がられるだろうか。

「あ、そう。わたしたちもそうよ」

塩田さんの連れの女性はいちおうダウンコートを羽織っているが、その下にパジャマであると思われるズボンをのぞかせている。おまけに靴も履いていない。もこもこしたぬいぐるみみたいな、うさぎをかたどった白いルームシューズは夜目にもわかるほど汚れていた。女性というか、子どもだな、としばらく観察して判断した。中学生ぐらいだろう。

塩田さんはたしか独身だったはずだ。以前、そのことを弄るような発言を誰かがしたことがあった。それを聞きとがめた社長が怒髪天をつく勢いで怒っていたので、よく覚えている。この子は、塩田さんの娘なのだろうか。結婚はしていないが子どもはいる、という意味だったのだろう。めずらしいことではない。

「一緒に歩かない？」

塩田さんは「実成くんが一緒なら、安心だから」と続けて、反応を窺うように実成を見た。

「夜道は危険ですもんね」

図体がでかいだけで腕力はからきしであるということは、このふたりには黙っていたほうがいいだろう。

「実成くん、大きいよね。百八十センチぐらいある？」

「ないです。百七十八センチで成長がとまりました」

善く生きろ、と父は言った。実成が子どもの頃に、何度となく。

言われるたび、うっすらと怯えた。父は自分の息子が善人ではないことに気がついているのだと思った。自分の立場があやうくなった時はとっさに嘘をつきたくなる。誰かをうらやんだり、ずるいと感じたりすることもしょっちゅうある。疲れて余裕がなくなると友人にも乱暴な言葉づかいをしてしまう。父は自分のそういうところを見抜いていたのではなかろうか。

善く生きること。でも、それが具体的にどういう生きかたのことなのかが、実成にはよくわからない。募金をするとか電車内で席を譲るとかということをすると、すこしだけ気がおさまる。でも長くは続かない。すぐにまた、ぼんやりとした不安に襲われる。モヤヤンが手足を押さえつけ、実成を立ち止まらせる。

伊吹さんが嘘をついたことは、正直言うと、そんなに悲しくなかった。悲しくない自分が嫌だった。別れを告げられても悲しくない、その程度の気持ちで交際をしていた自分のいいかげんさが浮き彫りになる。人の目を見るという行為は、同じだけ見つめ返されることを意味する。自分が善人ではないことを周囲の人に見破られそうで、だから実成は人の目を見るのがこわくなったのかもしれない。

もっちゃんは善人だ。まちがいなく。恋愛対象として好きだ、と思う以上に、彼女の正しさのようなものに憧れている。

住宅街が続く夜道は静かであかりが乏しい。海の底ってこんな感じやろかとひとり呟く。静

大きい、大きい、と塩田さんはしきりに言うが、實成には自分が大きいという自覚があまりない。公共の乗り物に乗った際には周囲の人間の頭を見下ろす機会も多いのだが。兄の夏生は身長が百八十五センチあるし、父も實成より大きかった。若い頃は「ロングマン」と呼ばれていたと聞く。身近な男ふたりから見下ろされて育ったせいだろうと自分では思っている。

「まあ、小さくはないですよね」

「いや、だから。大きいんだって」

夜の空気に冷やされた耳に触れながら、實成は塩田さん母娘からすこし距離をとって歩き出した。さきほどから塩田さんの娘の視線を感じる。見返すと目が合ってしまうので、気づいていないふりをし続けた。

スマートフォンが鳴り、見ると、もっちゃんからのメッセージだった。ことしもよろしく、とある。「あけましておめでとう」ではないのは、彼女もまた、喪中だからなのだろう。

「彼女？」

突然、塩田さんの娘が實成に訊ねた。いつのまにかすぐ隣にいる。メッセージのやりとりをする画面が見えたのかもしれない。画面の上部に表示された「望月ゆうな」の名も。

實成は答えなかった。つきあうとかつきあわないとか、そういう話はしていない。会って話すべきことだと思うが、なかなか会えない。言い訳だ、という自覚はある。

もっちゃんは忙しい人だ。医療機器メーカーに勤務しながら夜は語学の学校に通い、土日は

外国籍の子どもに日本語を教えるボランティア活動をして、そのあいまに病身の母親のケアをしているらしく、恋愛にかまけている暇はなさそうだ。實成の個人的恋情で「善き人」であるもっちゃんの人生の邪魔をしたくないという思いもある。これもやっぱり言い訳だ。

「前から訊きたかったんだけど、實成くんは悩みでもあるの？」

「なんでですか」

塩田さんが「いつもちょっと悲しそうだから」と即答したため、實成はしばらく言葉を失った。

「はじめて言われましたよ、そんなこと」

笑おうとしたが、うまくいかなかった。「悩みなさそう」とか「なんも考えてなさそう」と言われることのほうが多い。自分でも、実際そうなんだろうなという思いもあった。出生の秘密も家庭の問題も抱えていないし、壮絶な過去も心的外傷もない。あらゆる面でマジョリティ側に位置するようなそういう人間で、だから、悩みがあるとか生きづらいとか、そんなことを言うべきではないと。

「えびの背ワタってどうやったらきれいにとれるんですかね」

「えび？」

「はい。えびの、背ワタ。うまくとれないことに悩んでます」

その程度だ、と思われたい。そうすればまた、自分自身もそう思える気がした。その程度の

悩みしかないのだから、暗い顔をしていちゃいけない。

「力が入り過ぎてるのかもしれないね」

えびの背ワタは、と言いながら、塩田さんが空中で手を動かす。

「力み過ぎるとだめなの。ちぎれてしまうでしょう」

「そうです、ちぎれます」

「もっとこう、手の力を抜いて、こう、こうこう」

塩田さんの指が動く。ちっともわからない。

「力を抜いて、とか言われても困るよね」

黙って歩いていた塩田さんの娘が声を発した。

「それができたら苦労しねえよって言いたくならない？」

声を発したと思ったら、なにやら怒っている様子だった。

「みんな、軽率に良いこと言おうとしすぎなんだよ。人の悩みにアドバイスするってそんなに気持ちいいの？　なにが『力抜いて』だよ」

「……あの、今の、ふつうにえびの背ワタの話ですよね？」

突如怒り出した娘に困惑しつつ、塩田さんを見やる。塩田さんはこともなげに「そう。ふつうにえびの背ワタの話をしてるだけ」と頷いた。

それきり、塩田さんは黙った。塩田さんの娘も。だから實成も黙って歩いた。

「あ、ここ、わたしたちの家」

實成のアパートからそう遠くないマンションの前で、塩田さんが立ち止まる。いつのまにか町内をぐるっと一周してきたようだった。

ありがとう、と塩田さんが頭を下げた。ショートカットの後ろ髪がぴょこんと跳ねて、前髪にもさっとのっかった。

「實成くんが一緒だったから、心強かった」

「それはよかったです」

「最近、へんな事件多いし」

實成は「なぜそんなにもおそろしい夜道を、わざわざ歩くんですか」と問わない。ただ塩田さんの娘が履いているうさぎのルームシューズを見ている。彼女たちのこれはきっと単なる散歩ではない。なんなのかはわからないが、とにかくなにかもっと切実なもの。どうしようもない激情なり、衝動に駆られてのもの。今はただ、シンプルに「事情」としておく。彼女たちの抱える、なんらかの事情による、深夜の徘徊。

「塩田さん。よかったら、また一緒に歩きませんか？」

視線の先で白いうさぎが暗闇でかろやかに跳ね、「べつにかまわないけど？」という、つんと尖った声とともに實成に背を向け、遠ざかっていった。